

紀元前四世紀アテナイにおける 銀行家ネットワークの性質と機能

杉 本 陽 奈 子

【要約】 従来の研究では、前四世紀アテナイの銀行家はポリス社会から切り離された存在としてとらえられてきた。しかし、史料からは彼らが市民とも何らかの関係を築いていた様子を見てとることができるため、この見解には再考の余地があるといえる。そこで、本稿では銀行家の人的紐帯を網羅的に分析することで、銀行家とアテナイ社会との関係について再検討を試みた。その結果明らかとなったのは、当時の銀行経営は人的紐帯に依拠したものであり、銀行家たちは市民との関係も積極的に利用していたということ、他方で市民側も、銀行家との結びつきを必要とするような社会的状況に置かれていたということである。加えて、このような人的紐帯は、市民たちの社会的ネットワークに即する形で形成・維持されたものであった。すなわち、ここからはアウトサイダーというよりもむしろ、アテナイ社会内部と密接にかかわる存在としての銀行家像が浮かび上がるであろう。

史林 一〇〇巻二号 二〇一七年三月

はじめに

前四世紀のアテナイは、東地中海域における交易の中心地であったことが知られている。アテナイを交易圏に含む海上交易商人たちは様々な商品をアテナイの外港ペイライエウスに運び込んでいたが、とりわけ、穀物の安定的供給は当時の最重要課題の一つとされていた^①。また、アテナイには銀行業を営む者たちも存在しており、海上交易商人をはじめとする

多様な人々との間に取引を行っていた。^②このように、前四世紀アテナイは多くの人々が集まり、活発な商業活動が行われていた場所であったといえる。

ところが、アテナイの中核的構成員である市民たち自身は、主として農業に従事していた。つまり、商業活動に従事していた者の大半は、土地を持つことのできない非市民たちであったのである。^③特に銀行家たちは、その多くが奴隷出身者であったと考えられている。また、海上交易商人たちは物理的にポリスから離れている時間が長いことから、ポリス構成員としての社会との結びつきは希薄であったと想像される。^④そのため従来の研究は、当時のアテナイにおける商業従事者たちのことを、ポリス社会のアウトサイダーであるとして説明してきた。^⑤もちろん、市民の中にも少数ながら自ら商業に従事した人々は存在していたのであるが、先行研究ではこうした一部の市民たちについても、通常の市民とは言い難い者たちであったととらえられているといえる。^⑥

確かに、このような観点から見た場合には、商業従事者たちは一般的なポリス構成員とは性質の異なる人々であったといえるかもしれない。しかし、そのことは本当に、彼らがポリス社会から切り離された存在であったことを意味するのであるのか。というのも、史料からは、彼らが同業者のみならず、社会に根差したアテナイ市民たちとの間にすら一定の関係を築いていた様子を見てとることができるのである。^⑦そうであれば、このような商業従事者と社会との関係についてあらためて問い直すことは、アテナイ社会の理解を深めるためにも、商業活動を支えるメカニズム自体を明らかにするためにも、重要な課題であるように思われる。

筆者は、こうした問題意識のもと、すでに前四世紀アテナイで活動する海上交易商人に注目した分析を行っており、ここでは、アテナイによる穀物供給対策が、商人の人的紐帯と相互に影響を与え合う中で実現していたことを論じた。^⑧しかし、その分析に際しては、顕彰や商業裁判といった制度面に焦点を絞ったため、それ以外の部分において商業従事者と社会とがいかなる関係にあったのかについては十分に検討することができなかった。そこで、本稿ではこの点について、銀

銀行家を対象として考察を行いたいと考えている。ここで銀行家に注目するのは、海上交易商人についてのまとまった史料は前述のような制度に関するものが大半であるのに対し、銀行家については、それ以外の面での社会との交流を示唆する史料が豊富であることによる。これは、単に多くの情報が得られるというだけでなく、銀行家とアテナイ社会とのかかわりについて深く検討する必要があるということをも意味してしよう。また、金銭や物品を貸したり預かったりするという銀行業務の特殊性は、銀行家たちが他の商業従事者以上に幅広い人々と結びつくことにつながっていたと考えられる。そのため、そのような人的紐帯の形成に際してアテナイ社会が何らかの形でかかわっていた可能性を、独自に検討する必要があるであろう。加えて、銀行家は海上交易商人とも接点を有しているため、本稿の考察をおして、商人に関する旧稿の議論を、さらに広い視座の下に位置づけることが可能となるように思われる。

以上の理由から、本稿では銀行家とアテナイ社会とのかかわりを検討することで、銀行業を支えていたメカニズムと、アテナイ社会にとって銀行家の存在が有していた意味とを示すことを、最終的な目標としたい。

史料名等略号は、S. Hornblower, A. Spawforth, and E. Eidinow (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed. Oxford, 2012 に依拠する。また、本文中の引用はすべて筆者による訳読であり、訳文中の丸括弧は筆者による補いである。ギリシア語の長母音は原則として無視し、*o* の音については「フェニキヤ」等慣例となっているものを除き、*u* 行で表す。なお、注で言及する研究文献は、初出時を除き「著者名 + (出版年) + ページ番号」という形で表記する。

- ① Cf. [Arist.] *Ath. Pol.* 43, 4; *Thuc.* 2, 38; *Xen. Vect.* 3, 1-2.
- ② 銀行家に関する史料は、*NE* の *入札* から前四世紀に遡るものもある。しかし、B. Akragg, *The Nature and Implications of Athens' Changed Social Structure and Economy*, in R. Osborne (ed.), *Debating the Athenian Cultural Revolution: Art, Literature, Philosophy, and Politics 430-380 BC*, Cambridge, 2007, pp. 27-43 特 に pp. 36-37, 40 は、*NE* の *入札* は前五世紀に銀行家が存在しなかったことを証拠とはならないとする。
- ③ Cf. T. Sorg, *Agyrrios Beyond Attica: Tax-Farming and Imperial Recovery in the Second Athenian League*, *Historia* 64, 2015, pp. 49-76 特 に p. 58.
- ④ R. Bogaert, *Banques et banquiers dans les cités grecques*, Leiden, 1968, pp. 386-388.
- ⑤ Cf. H. Montgomery, 'Merchants Fond of Corn: Citizens and Foreigners in the Athenian Grain Trade, SO 61, 1986, pp. 43-61; P. McKechie, *Outsiders in the Greek Cities in the Fourth Century B.C.*

C., London and New York, 1989, pp. 180-181; C. M. Reed, *Maritime Traders in the Ancient Greek World*, Cambridge, 2003, pp. 54-61.

⑥ Cf. McKechnie (1989) pp. 3-5, 178-203; P. Millert, *Lending and Borrowing in Ancient Athens*, Cambridge, 1991, pp. 206-217.

⑦ アテナイ市民の中で商業に従事している海上交易商人については、例え³⁴ [Dem.] 35, 49; [Dem.] 49, 14-18; Dem. 58, 5, 10, 12; Andoc. 1, 137 を参照。銀行家については、E. E. Cohen, *Athenian Economy and Society: A Banking Perspective*, Princeton, 1992, p. 70, n. 44 を参照。

⑧ 例えば、アンドキデスが亡命中に商業活動を行っていたこと (Andoc. 1, 137) は、その典型例とみられる。Cf. McKechnie (1989) p. 181; Reed (2003) pp. 123-124.

第一章 先行研究と問題の所在

第一節 前四世紀アテナイの銀行に関する史料状況

古代ギリシアにおいて、銀行は「トラバザ τραπεζα」銀行家は「トラベジテス τραπεζίτης」と呼ばれていた。^① 古代ギリシア世界の銀行業について体系的な研究を行った Bogaert によれば、前五世紀末から前四世紀の間にアテナイで活動した銀行家としては、二五名の人名を史料中に確認することができる。^② ただし、その大半は断片的な言及にとどまっており、銀行について最もまとまった情報を提供するものは、主としてパシオンの銀行にかかわる法廷弁論である。

元々アンティステネスとアルケストラトスの奴隷であったパシオンは、前四世紀初頭までに彼らによって解放され、その銀行をも譲り受けた。^③ 彼は奴隷たちを用いて銀行を経営し、前三九四／三年から三七六年の間のいずれかの時点におい

⑨ 銀行家については、本稿第二章、第三章の分析を参照。

⑩ 拙稿「紀元前四世紀アテナイにおける穀物供給政策と海上交易商人」[「史林」九七―五、二〇一四年、一―三三頁。近年、C. Taylor and K. Vlassopoulos (eds.), *Communities and Networks in the Ancient Greek World*, Oxford, 2015 のように、古代ギリシア世界のネットワークに焦点を絞った研究がすすめられているものの、前四世紀アテナイの商業従事者のネットワークについては、依然としてはほとんど目が向けられていない状況にある。なお、本稿では、個別的な人的紐帯と、それらの集合体とを区別するに際して、それぞれ「人的紐帯」「ネットワーク」という用語を用いた。ただし、本稿の大部分ではそれらを厳密に区別する必要はないため、両者はしばしば互換可能なものとして用いられている。

て、おそらくはその経済的功績によりアテナイ市民権を獲得した後、前三七〇年代末には銀行経営を解放奴隷ボルミオンにゆだね、前三七〇／六九年に亡くなっている^④。ボルミオンはその遺言に従いパシオンの妻アルキツペを娶るが、パシオンとアルキツペの間には、アポドロロスとパシクレスという息子たちがいた^⑤。このうちアポドロロスは、アテナイで市民として政治活動を行ったことが知られている人物である^⑥。そして、このアポドロロスが訴訟当事者となっている弁論のうち伝デモステネス法廷弁論第五二番、四九番、三六番の三編、および、パシオンが被告とされているイソクラテス法廷弁論第一七番が、前四世紀アテナイの銀行業についての主要史料となっているのである^⑦。本稿では、これらの法廷弁論に加えて、他の銀行家に関する史料も含めて総合的に考察することにより、当時のアテナイにおける銀行家の特徴を明らかにしたいと考えている。

次に、前四世紀アテナイでの銀行業務について簡単に触れておく。次節であらためて言及するように、史料からは、銀行が預金や貸付といった業務を行っていたことが確認されている。また、銀行家が利用者のために証人や保証人をつとめている事例もいくつか見出される^⑧。しかし、銀行業務に関する史料は極めて限られており、その情報をどの程度一般化できるのかという問題を常にはらんでいるため、特に銀行業務全体の中で預金や貸付がどの程度の比重を占めるものであったかについては、議論が大きく分かれている^⑨。また、銀行がこれらの他に両替業務も行っていたとされることが多いが、これについても直接的な証拠は乏しく、商業の活発化に伴い両替の必要性が高まったであろうという状況証拠に大きく依拠した見解であるといえる^⑩。このように、銀行業務の内容についてはこれ以上具体的な事例に基づいた議論を展開する余地がほとんどないと思われるため、本稿ではこれらにとらわれずに、むしろ、銀行業務を支えていた基盤自体を明らかにすることを目指したいと考えている。

第二節 銀行業についての先行研究

さて、前四世紀アテナイの銀行業についての研究は、古代経済の性質をめぐる一九世紀末以来の論争の中ですすめられてきた。^⑩これは、古代経済を原始的なものともみなす立場（プリミティヴィズム）と近代的なものともみなす立場（モダニズム）との間で繰り広げられた議論であり、とりわけ一九七〇年代以降には Finley の研究の影響を受けたプリミティヴィズムが優位を占めるに至ったものの、その後も収束することなく継続してきたといえる。^⑪このような枠組みの中で考察がすすめられた結果、先行研究では銀行業務の経済的意義に議論が集中することとなり、その中で特に注目されることとなった論点が、銀行による貸付と預金の性格である。

貸付については、それらが嫁資の支払いや賓客の接待といった消費分野に限定されていたのか、^⑫それとも商業的利益を追求するような生産分野にも広がっていたのかという点、^⑬さらには、銀行が海上貸付を行ったか否かという点^⑭が主たる論点とされている。一方、預金については、利子が支払われたか否かに議論が集中している。^⑮しかし、銀行業務の内容については史料中の断片的な情報を手がかりとして推測せざるを得ないため、研究者の間では、同じ史料を用いながらも解釈が大きく分かれている状況にあるといえる。^⑯

こうした中で、銀行家の人的紐帯にまで考察が及んでいるのが、Millett、Cohen、Shington の研究である。このうち Millett は、アテナイにおける私的貸付について銀行に限らず網羅的に分析する中で、アテナイ市民の間では相互扶助的な無利子貸付のネットワークが張り巡らされていたと結論づけた。^⑰つまり、彼によれば、通常の市民はここから貸付を得ることができると、銀行を利用する必要はないと考えられる。従って、銀行の利用者であったのは、何らかの事情でこの社会的ネットワークを利用できない一部の市民や、非市民といった、社会のアウトサイダーたちであったといえる。^⑱

これに対し Cohen と Shipton は、市民間の貸付と銀行による貸付は、Millet のように完全に異質なものとみなすことはできないという立場をとる。まず Cohen は、銀行も無利子貸付を行う場合があることや、市民間の貸付にも商業的側面が見られる場合があることを指摘し、これらの貸付を単に無利子であるという特徴によって区別することはできないと論じる。一方 Shipton は、Millet が銀行の貸付をインパーソナルな性格のものだと想定していることを厳しく批判する。すなわち、彼によれば、実際には銀行の貸付もまた利用者との私的な友好関係に基づいて行われていたのであり、このような貸付はポリスの価値観と対立するものではなく、むしろアテナイ社会に浸透する素地があったと考えられるのである。²¹ また、彼は銀行による貸付とその他の私的貸付との比較をとおして、銀行には市民、非市民、富裕エリート、貧しい商人の金銭を統合する機能があつたと論じる。つまり彼は、銀行による預金・貸付業務が、市民と非市民の様々な経済領域を相互に結びつける役割を果たすものであつたのだと主張することによって、銀行をアテナイ社会から切り離してとらえている Millet 説への批判を展開するのである。²²

第三節 問題の所在

以上で概観した先行研究の問題点としては、次のような点が挙げられる。まず、これらの研究の多くは銀行による貸付と預金の性格について論じているものの、史料から得られる情報が限られているため、特定の事例を例外視するか否かによって、浮かび上がる像が大幅に異なってしまうという状況にある。Cohen は、これが従来の計量的な分析手法に起因する問題であることを指摘したうえで、史料の質的分析を行う必要性を強調しており、この主張には一定の説得力があるように思われる。²³ しかし、Cohen 自身の分析にもまた問題があるといえる。というのも、彼は銀行による預金と貸付が当時のアテナイ経済にとって重要な役割を果たしていたと論じているものの、²⁴ そのような経済上の貢献が実際にどの程度のものであつたかについては、明確な史料的根拠を提示することができないのである。これは、具体的な銀行業務の内容

自体に焦点を絞ってはいは、パシオンの銀行以外について十分な検証を行うことが困難であるために直面する問題であるといえる。そこで、この問題に対処するためには、複数の銀行家たちに関して得られるような情報、すなわち、人的紐帯に注目することが有効であると考える。つまり、銀行家の人的紐帯を網羅的に分析することによって、それらに共通して見られる特徴を明らかにすることができないのではないだろうか。銀行家たちはアテナイ市民を含む多様な人々と結びついているように思われるため、このような手法で考察をすすめることによって、本稿冒頭で述べたような、銀行家の人的紐帯とアテナイ社会とのかかわりについて検討することにもつながると考えられる。

さて、このような問題設定を行った場合、前節で確認したように、Millettが銀行をアテナイ社会の外部に位置づけていることに対して、CohenとShiptonが重要な反論を行っている点が注目に値する。しかし、彼らの主眼はあくまでも、市民と非市民との経済領域の結びつきについて論じることにあるため、アテナイ社会内部に張り巡らされたネットワークとの関係自体に関しては、十分に踏み込んだ考察を行っていないのである。従って、Millettがアテナイにおける社会的ネットワークと銀行家ネットワークとを切り離してとらえていることについては、依然として積極的な修正が加えられることのないまま現在に至っているといつてよい。そのため、利用者以外の者との関係も含め、銀行家が様々な人々との間に結んでいた人的紐帯を考察対象とし、その全体像を明らかにすることによって、アテナイ社会との関係について再考する必要があるであろう。つまり、Shiptonが預金や貸付による金銭の動きについて論じているのに対し、本稿では人的紐帯の機能自体を考察の中心に据え、その網羅的な分析を行うことで、社会的ネットワークとの関係についても、Millett説に修正を迫りたいと考えている。

もちろん、先行研究においても、アテナイ市民との関係が部分的に言及されることはあった。例えばCohenは、当時のアテナイでは、銀行家の奴隷や妻といったオイコス構成員が利用者との人的紐帯や情報・技術を保持するという、パーソナルな形での銀行経営が行われていたと論じる^⑤。ただし、彼の議論はオイコスの機能に重点を置いているため、ここで

言及されている銀行家の人的紐帯は決して網羅的なものではない。また、彼は、非市民の銀行家が市民身分の協力者を得ることで、土地所有権の欠如といった業務上の障壁を乗り越えることができたと指摘している²⁶。しかし、単に市民権を有する者との結びつきを列挙するだけでは、銀行家と社会との関係について十分に明らかとなったとはいえないように思われる。というのも、そのような市民が実際には極めて例外的であったり、社会から切り離されていたりするならば、彼らの存在は、Miehl説に対する有効な反証とはならないであろう。従って、考察に際しては、そのように銀行家と結びついていた市民たち自身が社会の中にどのような位置づけられる存在であったのかをも検討する必要があるのである。

また、岩田は、当時の銀行が將軍やトリエラルコス²⁷の資金供給源となっていたと指摘しているが、人的紐帯の性質自体については立ち入った考察を行っていないため、彼らがなぜ銀行をそのように利用することが可能であったのかは明らかとされていない²⁸。それゆえ、この点について、銀行家と結びついている他の市民たちの事例とも照らし合わせつつ、あらためて説明を加える必要があるであろう。以上のような理由からも、銀行家の人的紐帯の全体像を提示することが求められているといえる。

そこで、以下では、こうした銀行家が利用者およびそれ以外の人々との間に結んでいた人的紐帯の総体を「銀行家ネットワーク」と呼び、これについてまとまった分析を行うことで、アテナイ社会とのかかわりに目を向けつつ、次の三点を明らかにしたい。第一に、銀行経営にとつてのネットワークの性質とその機能、第二に、そうした銀行家ネットワークの特徴、第三に、アテナイ社会にとつての銀行家ネットワークの存在の意味である。これらの検討とおして、当時の商業活動の一つである銀行業に関して、実際の運営面を支えていたメカニズムを提示すると同時に、こうした銀行家たちの活動の場となっていたアテナイ社会についても、その理解を深めることができるのではないかと考えている。

① Bogart(1968) pp. 37-41. なお、これらが近代的な銀行と同様の業務を行っていたかどうかについては様々な議論があるが、先行研究で

は伝統的に「銀行」という表記が採用されてきたことから、本稿でもこれに従うこととする。銀行および銀行家の定義をめぐっては、

Cohen(1992) pp. 8-9を参照。 Cf. S. Isager and M. H. Hansen (eds.), *Aspects of Athenian Society in the Fourth Century B. C.*, Odense, 1975, pp. 88, 96.

② Bogaert(1968) pp. 61-92.

③ この経緯については詳細が不明であるが、J. C. Trevett, *Apollodoros the Son of Pasion*, Oxford, 1992, p. 18, n. 18は「ミンホーンが当初は銀行を賃借し、その後購入したものと推定している。これらの銀行家の系譜については、F. Bourriot, *Une famille de banquiers athéniens celle d'Antimachos*, *Ve-YVe S, ZPE* 70, 1987, pp. 229-234 及び Trevett(1992) pp. 1-17を参照。

④ Trevett(1992) pp. 5-9, 21, n. 9. 前沢伸行「ポリス社会に生きる」山川出版社、一九九八年、四一―四二頁。なお、Dem. 45, 85では、彼が盾一〇〇〇枚を寄付したことが言及されている。Cf. [Dem.] 59, 2. ラロスをうとめたことが言及されている。Cf. [Dem.] 59, 2.

⑤ Dem. 36, 28-30では、銀行家が解放奴隷の妻をよそ例が少なへんかしたと述べられている。

⑥ アポロネオスの政治家としての経歴については、Trevett(1992) pp. 124-154. 前沢（一九九八）七八―八二頁を参照。

⑦ これらの法廷弁論の内容については、前沢（一九九八）一八一―三四五―五一九頁に詳しく。

⑧ Cf. Millert(1991) p. 217.

⑨ Cf. Cohen(1992) pp. 18-25.

⑩ Cf. Isager and Hansen(1975) pp. 90-91; Cohen(1992) pp. 18-22.

⑪ この論争が海上交易商人に関する先行研究に与えた影響については、拙稿（二〇一四）四―七頁を参照。

⑫ Finley以降の議論については、M. I. Finley, *The Ancient Economy*, Updated ed., Berkeley, 1999, pp. ix-xxvii. 所収の Morris ↓

44の序文、及び伊藤貞夫「史料研究と半説史——古代経済史の場合——」『日本学七誌紀要』大正二〇一〇年、一〇九―一四〇頁を参照。

⑬ Bogaert(1968) pp. 356-375, 411-413. R. Bogaert, *La banque à Athènes au IV s. av. J.C.*, état de la question, *MH* 43 1986, pp. 19-49 特、pp. 24-26 注、銀行による貸付が行われた二例の事例中二例のみが生産分野に関するものであったことが、銀行は消費的貸付を行っていたと認めることが Isager and Hansen(1975) pp. 97-98, P. Millert, *Maritime Loans and the Structure of Credit in Fourth-Century Athens*, in P. Garnsey, K. Hopkins and C. R. Whitaker (eds.), *Trade in the Ancient Economy*, Berkeley, 1983, pp. 36-52 特、p. 43, 注、これを支持する見解を示している。

⑭ W. E. Thompson, *A View of Athenian Banking*, *MH* 36, 1979, pp. 224-241 特、pp. 224, 230-233. E. E. Cohen, *Commercial Lending by Athenian Banks: Cliometric Fallacies and Forensic Methodology*, *CPH* 85, 1990, pp. 177-190 特、p. 183; L. M. Gluskina, *Some Aspects of Money VDJ* 3, 1970, pp. 17-43 注、Bogaert の解釈を退けて、とりわけ Cohen 注、Bogaert 注の一例中二例のみが生産的性格であったとするものの、残り九例が消費的性格であったことは示していることについて、このような計量的な分析手法自体を問題視する。

⑮ 銀行による海上貸付の有無については、それを示す直接的な史料がほとんどない状況にある。前四世紀アテナイでは、海上交易商人に対する海上貸付がさかたに行われていたが、史料中には、銀行家がその貸し手をとめていることを明確に示す事例が一例も確認できないのである。銀行家が海上交易商人に貸付を行った事例は、[Dem.] 33, 6-7に一例確認されるものの、これは厳密には海上貸付ではなく、別の著者の借金返済のために融資されたものである。そのため、研究者

たが、G. M. Calhoun, *The Business Life of Ancient Athens*. Chicago, 1926, p. 103; Bogaert(1968) pp. 355-357, 373-375, 411-413; Bogaert(1986) pp. 27-29; Isager and Hansen(1975) p. 88 の「*banking*」の語彙を根拠に銀行による海上貸付業務は一般的にはなかったと主張する。Gluskina(1970) pp. 29, 43; E. Erxleben, *Die Rolle der Bevölkerungsklassen im Aussehenhandel Athens im 4. Jahrhundert v. u. Z.*, in E. C. Weltskopf (ed.), *Hellenische Polis: Krise, Wandlung, Wirkung*. Berlin, 1974, pp. 460-520 特々 pp. 490-494; Thompson(1979) pp. 235-237; 伊藤貞夫『古典期のギリシア社会』岩波書店、一九八一年、二二一-二二六頁; Cohen(1992) pp. 136-150 の「*banking*」海上交易商人が何らかの形で銀行を利用していたことを示す史料に基づいて、銀行家もまた海上貸付を行っていたと判断する立場に二分されている。ただし、Thompson(1979) pp. 240-241 は銀行が海上貸付の重要な提供者ではなかったと主張する。また、K. M. W. Shipton, *The Private Banks in Fourth-Century B. C. Athens: A Reappraisal*. CQ 47, 1997, pp. 396-422 特々 pp. 419-420 は「銀行が海上貸付を行ったか否かという問いを立て方自体を批判」し、銀行が海上交易を促進したか否かという観点から分析をすすめている。なお、前四世紀アテナイでは、船または積み荷を抵当とする海上貸付が行われていた。その特徴としては、高利子である一方で、商船が難破した際には返済義務が免除されるといった点が挙げられる。こうした海上貸付については、Isager and Hansen(1975) pp. 74-84、前沢伸行「紀元前五、四世紀のマテナイにおける海上貿易と *banking*」『西洋古典学研究』二五、一九七七年、四三-五三頁を参照。

⑩ 貸付の性質をめぐる議論同様、利子についてもその存在を明確に証明しうるような事例は確認をすることができな。そのため、Isoc. 17, 42-44; Dem. 27, 9-11; Dem. 45, 63-66; Schol. Dem. 24, 136 など

利子の存在を示す可能性のあるいくつかの史料の解釈が、この問題に関する最大の争点となっている。そして、先行研究では、J. Hasebroek, *Zum griechischen Bankwesen der klassischen Zeit*. Hermes 55, 1920, pp. 113-173 特々 pp. 146-152; H. Knorrhga, *Empores: Data on Trade and Traders in Greek Literature from Homer to Aristotle*. Amsterdam, 1926, pp. 87-88; R. Bogaert, *Banquiers, courtiers et prêts maritimes à Athènes et à Alexandrie*. *Chronique d'Égypte* 40, 1965, pp. 140-156 特々 pp. 140-146; Bogaert(1968) pp. 331-351; Bogaert(1986) pp. 19-24; Shipton(1997) pp. 414-416 の「*banking*」銀行が利子を支払っていたことを示す立場と、Calhoun(1926) pp. 100-101; Thompson(1979) pp. 224, 238-239; Millett(1991) pp. 238-241; 前沢(一九九八)三五六頁の「*banking*」それか否定する立場に二分されている。また、岩田拓郎「Demosthenes, XXXVI, 3 の解釈をめぐる二・三の問題——古代ギリシア「銀行」史の一断画——」『北海道大学文学部紀要』二二二、一九七四年、一〇一-一〇九頁、特々二五三-二五八頁は「*banking*」の一般化を行わず、利子がつくかどうかは銀行家と預金者との間でその都度決定されるものであったと論じている。なお、Calhoun(1926) p. 101 の「*banking*」Thompson(1979) pp. 225-226, 238-239 は、預金が行われたのは利子を得るためではなく、安全と便宜のためであったとする。利子が支払われていない事例として、Dem. 52, 3 と Hyp. Ath. 4-9 を参照。

⑪ Cohen(1990) pp. 178-180 特々「*banking*」した解釈が、研究者の前提とする立場に大きく規定されている状況を指摘する。なお、銀行の資産について、Hasebroek(1920) pp. 165-170; Bogaert(1968) pp. 388-390; Bogaert(1986) pp. 35-42; E. Erxleben, *Das Kapital der Bank des Pasion und das Privatvermögen des Trapeziten*. *Klio* 55, 1973, pp. 117-134 を参照。

- ③ Millet(1991) pp. 127-159.
- ④ Millet(1983) pp. 42-52. Millet(1991) pp. 197-217.
- ⑤ Cohen(1992) pp. 207-215.
- ⑥ Shipton(1997) pp. 401-412.
- ⑦ Shipton(1997) pp. 412-422. また K. M. W. Shipton, Bankers as Money Lenders: The Banks of Classical Athens, in K. Verboven, K. Vandorpe, and V. Chankowski (eds), *Pistoi dia ten technen: Bankers, Loans and Archives in the Ancient World: Studies in Honour of Raymond Baggett*, Leuven, 2008, pp. 93-114.
- ⑧ Cohen(1990) pp. 177-186.
- ⑨ Cohen(1992) pp. 190-191, 202-224.
- ⑩ Cohen(1992) pp. 61-90. なお、わが国では桜井万里子「ある銀行家の妻の一生」地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、二〇〇三年、二〇三―二三九頁が、Cohenの見解をふまえて、銀行家の妻の役割について考察を行っている。ただし、本稿では銀行家ネットワークとアテナイ社会のかかわりを主たる考察対象とするため、妻や奴隷については深く立ち入らないこととする。
- ⑪ Cohen(1992) pp. 98-101.
- ⑫ 岩田（一九七八）七三―一〇〇頁。

第二章 銀行経営とネットワーク

銀行家たちは、先行研究が関心を向けてきた貸付・預金業務以外の面でも、様々な形で人的紐帯を形成していた。本章では、【一覽表】にまとめたこれらの人的紐帯を種類ごとに検討することで、それが銀行経営にとっていかなる役割を果たすものであったのかを確認する。そのうえで、銀行家と利用者との関係についてさらなる分析を行い、その特徴を導き出すこととする。なお、以下で言及する事例番号は【一覽表】のものに対応する。

第一節 銀行経営にとっての人的紐帯

以下ではまず、銀行家と利用者との関係について確認していく。史料中で、ある人物が銀行を利用するようになった具体的経緯について詳述されている事例としては、事例一、二、四、六、八、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一七、一九、二〇の計一四例を確認することができる。興味深いことに、これらのうち五例において、第三者による紹介が行わ

れていることが確認される。^①まず、事例一では、フェニキア人ピュトドロスの紹介を通じてソパイオスの息子がパシオン
の銀行を利用している。^②また、事例二では、海上交易商人リユコンが、自分の不在中に仲間に金銭を渡すようにと銀行に
頼んでいるが、銀行家はその仲間と面識がないため、第三者が彼を紹介するという手順を踏んでいる。^③事例一三では、テ
イモテオスは海上交易商人ピロンダスに運賃を支払うことをパシオンに依頼しているが、その際、テイモテオス本人がパ
シオンにピロンダスを紹介している。^④事例一四では、アポロドロスが銀行家テオクレスに、ニコストラトスに融資するよ
う説得を行っている。^⑤そして、事例一七では銀行家ヘラクレイデスが海上交易商人に貸付を行っているが、ここでは、そ
の商人の知人である第三者が銀行家を説得している。^⑥

さらに、これらを除いた残りの事例のうち、事例四、六、一〇、一一、一二、一九、二〇については、銀行家と利用者
とが、以前から継続的な関係を有している事例である。例えば、事例四ではテイモステネスが銀行に金銭と益を預けてい
るが、その理由として、「テイモステネスはポリミオンにとつて友人であり仲間であるので」という説明がなされている。^⑦
また、事例六で銀行を利用しているステパノスは、後述するように、銀行家ポリミオンと継続的に結びついていたことが
知られている。^⑧そして、事例一〇、一一、一二はいずれも將軍テイモテオスに関する事例であり、これらは彼がパシオン
の銀行を繰り返し利用していたことを示している。^⑨また、事例一九、二〇は、先に述べた事例一と同様ソパイオスの息子
に関する事例である。^⑩

以上のように、具体的経緯が読みとれる事例の大半において、銀行を利用しているのは、すでに継続的な関係にある者、
あるいは知人から紹介された者たちであったという状況を確認することができた。^⑪これは、次のように解釈できるであろ
う。すなわち、銀行家たちはリスク回避の手段として、人的紐帯を通じて信用が担保されている人物に取引を限定してい
たと考えられるのである。

このことは、紹介が行われている事例のさらなる検討によっても裏づけられるように思われる。というのも、第三者に

【一覧表】前4世紀アテナイの銀行家の人的紐帯

No.	史料	銀行家との人的紐帯に関する事例	人的紐帯の種類	備考
1	Isoc. 17. 4	ソバイオスの息子がバシオンの銀行を利用	利用者（預金）	フェニキア人ピュトドロスによる紹介
2	[Dem.] 52. 3-4, 7, 11	バシオン、海上交易商人リュコンの金銭を仲間のケビシアデスに渡す約束	利用者（預金）	リュコンのクセノスがバシオンにケビシアデスを紹介
3	Dem. 27. 11	父デモステネスがバシオンの銀行とピュラデスの銀行に預金	利用者（預金）	
4	[Dem.] 49. 31-33	海上交易商人ティモステネス、ボルミオンに金銭とともに盃を預ける	利用者（預金・保管）	ボルミオンの友人であり仲間であるため
5	[Dem.] 47. 51, 57, 64	市民が銀行に預金	利用者（預金）	
6	Dem. 45. 66	ステバノス、銀行に預金	利用者（預金）	
7	[Dem.] 48. 12	コモン（市民）、ヘラクレイデスの銀行に預金	利用者（預金）	
8	Hyp. Ath. 5	エピクラテス、銀行に40ムナを預金	利用者（預金）	
9	Schol. Dem. 24. 136	アテナ女神財務官、聖財から銀行に貸付	利用者（預金）	その後銀行が倒産
10	[Dem.] 49. 6-7	バシオン、遠征直前のティモテオスに貸付	利用者（貸付）	
11	[Dem.] 49. 14-17	ティモテオスが遠征中にアンティパネスとピリッポスから借金 →帰国後バシオンがピリッポスに支払う	利用者（貸付）	
12	[Dem.] 49. 22-24	ティモテオス、乗客時にバシオンから寝台・衣類・盃・銀1ムナを借用	利用者	
13	[Dem.] 49. 26-27	ティモテオス、海上交易商人ピロンダスへの運賃支払いをバシオンに依頼	利用者	ティモテオスがバシオンにピロンダスを紹介
14	[Dem.] 53. 9	アポロドロス、ニコストラトスに1000ドラクマ渡すよう銀行家テオクレスに依頼	利用者（貸付）	銀行家が、第三者の依頼を受けて貸付を行っている事例
15	[Dem.] 40. 52	銀行家プレバイオス、マンティテオス（市民）に20ムナ貸付	利用者（貸付）	
16	Dem. 19. 293	聖財担当のケピソボン、銀行に金銭を納める	利用者（貸付）	
17	[Dem.] 33. 6-7	銀行家ヘラクレイデスが海上交易商人に貸付	利用者（貸付）	紹介による／紹介者が保証人となる
18	Lys. fr. 38. 1	銀行家ソシノモスとアリストゲイトン、アイスキネスに貸付	利用者（貸付）	
19	Isoc. 17. 35-37	ストラトクレスがソバイオスからもその息子からも返済されない場合に、バシオンが代わりに支払う約束	利用者（保証人）	ソバイオスの息子がストラトクレスを紹介
20	Isoc. 17. 43	ソバイオスの息子が死刑にされかけた時、バシオンは彼のために保証人を立てる	利用者（保証人）	銀行家アルケストラトス（元主人）を保証人とする
21	[Dem.] 35. 13-14	ボルミオン、海上貸付における証人の一人となる	利用者（証人）	
22	[Dem.] 34. 6	銀行家キツトスが海上貸付文書を保管	利用者（保管）	
23	[Dem.] 56. 15	銀行家が海上貸付文書を保管	利用者（保管）	
24	/G II ² 2741	エウクレスによる文書保管	利用者（保管）	
25	Isoc. 17. 38	ヒッポライダス（ソバイオスの息子のクセノス）がバシオンの銀行を利用	利用者	
26	[Dem.] 52. 3-4	海上交易商人がバシオンの銀行を利用	利用者	
27	Dem. 36. 50	銀行家アリストロコス（市民）、返済のために土地を手放す	利用者／その他	
28	Dem. 36. 50-51	銀行家ソシノモス、返済のために全財産を手放す	利用者	

29	Dem. 36. 50-51	銀行家ティモテオス、返済のために全財産を手放す	利用者	
30	Aeschin. Ep. 6	アリストンの親戚のために、銀行家カルモラスが金を渡す	利用者	
31	Isoc. 17. 15-17	バシオンとソバイオスの息子との問題について拷問執行官を選出	仲裁	
32	Isoc. 17. 19, 51-52	ソバイオスの息子とバシオンとの問題について、サテュロスによる仲裁	仲裁	裁定下さず/商人を集めソバイオスの息子を守らせる
33	[Dem.] 52. 14-16, 30-31	バシオンとカリッポスとの問題についてリュシテイデスによる仲裁	仲裁	カリッポスやイソクラテスらの友人/バシオンの知人 →バシオン存命中は不利な裁定を下さず
34	[Dem.] 49. 19	バシオンとティモテオスとの問題について仲裁	仲裁	
35	[Dem.] 49. 43-44	仲裁に際し、バシオンの銀行にブラシエリデスを送り、台帳の写しをとる	仲裁	
36	Dem. 36. 15	ボルミオンとアポドロロスとの問題について、リュシノスとアンドロメネスがボルミオン側の仲裁者をつとめる→ボルミオンに助言	仲裁	
37	Isoc. 17. 51-52	バシオン、サテュロスによる仲裁に際し自身の代わりに奴隷キットスを送る	味方 (従業員)	バシオンに不利な裁定が下されることを阻止する一因に
38	[Dem.] 52. 5-6, 18-19	ボルミオンが銀行側の主張を支持する証言	味方 (従業員)	
39	[Dem.] 49. 18	ボルミオンが銀行側の主張を支持する証言	味方 (従業員)	
40	[Dem.] 49. 33	従業員と代金を受け取った本人が、銀行側の主張を支持する証言	味方 (従業員)	
41	[Dem.] 50. 18, 56	テネドスとランブサコスにバシオンのクセノイ→息子も利用	味方 (国外)	
42	Isoc. 17. 31-32	バシオン、アギュリオスにソバイオスの息子の説得を依頼→説得失敗 →その後アギュリオスはソバイオスの息子のために証言	味方 (有力者)	アギュリオスはバシオンとソバイオスの息子両方の友人
43	Isoc. 17. 33	友人ビュトドロス、バシオンのために何でも行う者であるとされる	味方	
44	[Dem.] 49. 47	友人カリストラトス、バシオンに協力する存在として想定	味方	カリストラトスはアンティマコスの財産を売却した人物
45	[Dem.] 49. 19	アンティバネス、銀行側の主張を支持する証言を行う約束 →ティモテオスに説得され、証言を行わず	味方	
46	Isae. fr. 8. 1	クセノクレス (市民)、親しい関係にあるエウマテスが銀行を開業する際に資金提供/奴隷に戻されそうになった際に守る	味方	クセノクレスは開業以前からエウマテスに金銭を預ける
47	Dem. 36. 1	ボルミオンの代わりに友人が弁論を行う	味方	
48	Dem. 45. 63-64	ステパノス、友人ボルミオンのため証言/使者としてビュザンティオン訪問	味方	ボルミオン以前にはアリストロコスとの結びつき
49	Isoc. 17. 20	バシオンとソバイオスの息子、秘密裏の約束を記した文書をビュロンに託す	その他	バシオンはビュロンの奴隷を買収したとされる
50	Dem. 45. 63-64	ステパノス、銀行家アリストロコスにつき従う	その他	アリストロコスの破産後、彼の息子のために協力せず
51	Dem. 45. 60	ボルミオンの友人たち、ステパノスによる文書窃盗について証言	その他	
52	Dem. 21. 215	デモステネスのもとに銀行家ブレバリオスが近寄る →市民たちはデモステネスが金銭を受け取ろうとしていると考える	その他	
53	Aeschin. 2. 165	デモステネスがボルミオンのために弁論を書いておきながらアポドロロスの味方をしたとして、アイスキネスにより批判	その他	
54	Din. 1. 43	銀行家エビゲネス、デモステネスの提案により市民権付与	その他	
55	Din. 1. 43	銀行家コン、デモステネスの提案により市民権付与	その他	

よる紹介が行われている事例のうち、事例一、二では利用者の金銭や貴重品を預かる業務が行われており、これらについては、銀行側のリスクは比較的低いものであるといえる。^⑫ 残る事例のうち、事例一三では將軍ティモテオスが海上交易商人ピロンドスを紹介し、彼に金銭を支払うように依頼しているが、その金銭は後にティモテオスが支払うことになるため、ここでの実質的な銀行利用者はティモテオスであるといえる。^⑬ そして、このティモテオスは前述のとおり銀行家パシオンとの間に継続的な関係を形成しており、かつ、アテナイの有力政治家である。一方、事例一七では銀行家が海上交易商人に貸付を行っているが、ここでは第三者が単なる紹介者にとどまらず保証人をつとめており、もし利用者が返済しない場合には代わりに金銭を支払うことを約束している。^⑭ また、事例一四ではアポドロスが、ニコストラトスに一〇〇〇ドラクマを融資するよう説得するに際し、父から相続した黄金製品を銀行家に手渡ししている。^⑮ つまり、以上の事例からは、銀行側が利用者に金銭を支払うという高いリスクを伴う場合には、すでに継続的な人的紐帯を形成しているような人物であるか、そうした人物を介して具体的な保証手段を定めるといったように、より確実に信用を担保する手法が用いられている状況が見てとれるのである。

また、伝デモステネス法廷弁論第四九番には「私の父は、いったい何の友情から、彼が何も知らないボーイオティアのナウアルコスに対して一〇〇〇ドラクマを貸すことができたのだろうか」という言及がみられ、ここでは、銀行家パシオンが親しくない者たちに貸付を行ったはずがないという主張がなされている。^⑯ 加えて、史料中では、銀行は基本的に取引に立ち会う証人を置かなかつたとされており、先行研究はこれを、一般的な海上貸付とは異なる銀行の取引の特徴であると指摘している。^⑰ このことも、銀行利用が既存の信用関係を前提としていることを示しているといえよう。

それでは、銀行家は、利用者以外との間にはいかなる関係を形成していたのであろうか。史料中には、主として仲裁者と味方という二種類の関係を見出すことができるため、以下ではこれらについて順に検討する。

当時のアテナイでは、紛争解決に際してまずは私的仲裁が行われることが一般的であり、多くの場合、仲裁者には訴訟

当事者双方の知人が選出された¹⁹⁾。当然ながら、こうした仲裁者には中立的な立場をとることが求められていたが、そのような中でも、例えば事例三六では、ポリミオンとアポドロロスとの争いに際し、仲裁者リュシノスとアンドロメネスがポリミオンに助言を行っている様子が見てとれる²⁰⁾。また、次章で詳しく検討することになるが、事例三二および事例三三は、個人的な結びつきがとりわけ強い者に対しては不利な判定を下しづらい状況にあったことを示している²¹⁾。つまり、業務の性格上紛争に至る機会が多い銀行家たちにとって、仲裁者となる可能性のある者との間に、できる限りの協力を期待できるように関係を築いておくことが望ましかったと考えられる。

次に、銀行家に味方をしている者たちに目を向ける。史料中には、銀行の従業員が銀行側の主張を支持する証言を行ったり²²⁾、使者の役割を果たしたりしている例を見出すことができるが、こうした従業員の他にも、多くの人々が銀行家のために味方していることが読みとれる。例えば、事例四二では、アテナイの有力政治家アギュリオスが、パシオンのために紛争相手であるソパイオスの息子を説得している²³⁾。また、事例四三ではピュトドロスなる人物が、事例四四ではカリストラトスが、それぞれパシオンに協力する存在として想定されている。他にも、事例四五ではアンテイパネスが銀行側の主張を支持する証言を行うことを約束しており²⁴⁾、事例四七ではポリミオンの友人が彼を擁護する弁論を行っている²⁵⁾。加えて、事例四八ではステパノスが友人ポリミオンのために証言を行っているほか、彼の使者としてピュザンティオンを訪問している²⁶⁾。さらに、事例四六ではアテナイ市民クセノクレスが、友人エウマテスが銀行を開業する際に資金を提供し、彼が奴隷に戻されそうになった際にはこれを阻止しようとしている²⁷⁾。

こうした銀行家の味方は、アテナイ内部にとどまらず、国外にも存在していた。例えば、伝テモステネス法廷弁論第五〇番からは、テネドスとランプサコスにパシオンのクセノイがいたということ、そして、これらのクセノイとの人的紐帯が、パシオンの息子であるアポドロロスすら利用可能なものであったということがうかがわれる²⁸⁾。

「さて、私は父のテネドス人のクセノイであるクレアナクスとエペラトスから借金し、兵士たちに食糧費を与えた。というのも、パシオンの息子であること、そして彼が多くの人々とクセノス関係にありギリシアで信用されていることのゆえに、私はここで必要となっても、借金するのに困ることがなかったのである。」^④

銀行家には、時にこのような国外との結びつきが必要となる場合があったと考えられる。例えば、イソクラテス法廷弁論第一七番では、銀行家パシオンが自らの立場を守るために従業員である奴隷を隠したとされているが、その奴隷は、後にペロポネソスで発見されている。^⑤さらに、パシオンとボスポロス出身者との紛争について、アテナイの外で和解交渉を行うことが計画されているが、これは、「できるだけこのポリスから遠く離れて契約について調停するように、そして、ここにいる人々のうちの誰も調停の方法について知ることがなく、彼（＝パシオン）が帰航してから望むことを言えるように」という配慮によるものであったとされている。^⑥また、伝デモステネス法廷弁論第三三番では、ヘラクレイデスの銀行が倒産した際、銀行家自身が身を隠している。^⑦これらの事例はいずれも、銀行家が危うい立場となった際に、アテナイを物理的に離れる必要が生じていたことを示している。そして、銀行家の国外ネットワークは、このような際に機能するものであったとみてよいであろう。

こうした直接的な味方の他にも、銀行家の人的紐帯はいくつかの興味深い機能を果たしている。例えば、イソクラテス法廷弁論第一七番では、パシオンは元主人であるアルケストラトスを保証人としているが、これは一般的には、パシオンが当時まだ市民権を獲得しておらず、この役割を果たすことができなかったためであると解釈されている。^⑧つまり、Cohen が指摘するように、銀行家は自身が非市民であるために生じる業務上の支障すら、元主人を頼ることによって乗り越えることができたといえる。^⑨さらに、デモステネスの提案によって銀行家に市民権が付与された事例が二例確認されるが、この背景には、デモステネスとこれらの銀行家との間に個人的な結びつきがあったとされている。^⑩前述のアルケス

トラトスの事例と比較すると、銀行家が市民権を得た場合、元主人を介することなく自ら保証人となったり、土地を抵当とした借財を行ったりすることができるようになることから、人的紐帯をとおして市民権を獲得することは、銀行業務の円滑化につながったとみなすことができよう。^⑧

以上のように、本節での分析をとおして、銀行家の人的紐帯は次のような機能を有していたことが明らかとなった。第一に、取引や紛争に際してのリスク回避、第二に、銀行の開業や市民権所有者のみに可能である業務を行うといった、銀行業務の拡大・円滑化である。ここからは、銀行家ネットワークが、銀行経営の根本にかかわる部分を支えているという状況を見てとることができるであろう。

第二節 銀行家と利用者との相互協力関係

前節の検討によつて、銀行家の人的紐帯が銀行経営を様々な形で支えていたことが明らかとなった。しかし、史料からは、こうした人的紐帯は銀行家側だけが一方的に利用するものではなく、利用者側にとつても重要な意味を持つものであったことがうかがわれる。そこで、本節ではそうした銀行利用者の視点にも目を向けつつ、両者が相互に協力する関係を築いていたことを確認する。

まず注目すべきなのが、銀行家はその業務上、利用者の機密情報を保有する場合があったということである。例えば、イソクラテス法廷弁論第一七番とデモステネス法廷弁論第四五番からは、銀行が利用者の預金の隠蔽に加担している事例を見てとることができる。前者では、ポスボロス王国の有力者であるソパイオスの息子が、遊学中に母国で生じた政治的変動のゆえに財産を差し押さえられる状況となった際、銀行家パシオンに頼つて、預金の存在を隠している^⑨。後者では、アテナイ市民であるステパノスが、公共奉仕を逃れるために銀行家と共謀し、預金の存在を隠したとされている^⑩。つまり、財産額に応じて公共奉仕や臨時財産税が課された当時のアテナイ社会では、預金という「目に見えない財産」を扱う銀行

家は、利用者にとって極めて重要な情報を共有すると同時に、その隠蔽に際し協力を得ることが不可欠となる存在であったのである。^⑭

また、伝デモステネス法廷弁論第四九番の事例では、將軍ティモテオスが銀行から貸付を受けているが、彼は公的な会計報告においてその事実を伏せ、軍事費から支出を行ったと報告している。^⑮ところが、銀行による貸付が行われる際には、銀行家はその利用目的を台帳に記しており、この台帳は、状況によっては第三者に公開される場合もあった。^⑯従って、銀行家は、將軍が実態とは異なる会計報告を行ったということを示す証拠を握っていたことになるのである。以上の事例は、銀行家と利用者との関係が、単なる金銭取引にとどまらず、機密情報の共有という極めて密接な協力関係にまで発展し得るものであったことを示している。そして、こうした関係は、先に見たような銀行業務自体の性質がもたらした副産物であったといえる。

さらに、史料中には、こうした機密情報以外の面でも、銀行家と利用者との間に金銭取引を越えた結びつきが形成されていたことを確認することができる。例えば、事例四の海上交易商人ティモステネスは、銀行家ポリミオンの「友人であり仲間」であると形容されている。^⑰彼らの関係についてはこれ以上詳細な情報を得ることはできないが、少なくとも、「友人」や「仲間」という言葉からは、彼らが単なる預金や貸付といった金銭取引を行うだけではなく、より幅広い場面で相互に協力し合うような関係を築いていたとみることができよう。また、伝デモステネス法廷弁論第四九番では、パシオンが、將軍ティモテオスに便宜を図ることによって、彼から将来的な見返りが得られることを期待していることから、彼らの関係もまた、継続的かつ相互扶助的性格を帯びたものであったことが読みとれる。^⑱このことは、Trevetが指摘しているように彼らの間での貸付が、抵当や利子を伴わない点で友人間の貸付と似た特徴を有していることから傍証されるであろう。^⑲さらに、事例六でポリミオンの銀行に金を預けているステパノスは、前述のように、ポリミオンのために証言を行ったり使用者の役割をつとめたりしている。^⑳従って、彼らの関係にも継続的な相互扶助的性格を見てとることができ

よう。このステパノスは、ポリミオンのみならずアリストロコスなる銀行家とも結びついていたが、デモステネス法廷弁論第四五番では、そのアリストロコスの息子を助けなかったことが非難の対象となっている。^{⑤④}ここからは、ステパノスとアリストロコスとの関係もまた、本来は相互扶助的なものとして想定されていると解釈できるであろう。他にも、事例四五においてエウマテスに金銭を預けているクセノクレスは、その後エウマテスが銀行を開業するに際して資金提供を行っていることから、両者の間には継続的な関係を見ることができると推察される。^{⑤⑤}そして、銀行家への市民権付与を行ったデモステネスについても、複数の銀行家との間に親密な関係を形成していること、および、彼の父親がパシオンの銀行を利用していたということ^{⑤⑥}をふまえるならば、彼自身も銀行を利用していた可能性は極めて高いように思われる。

このように、銀行家は利用者との間に、様々な形で金銭取引を越えた継続的な相互協力関係を形成していた。さらに、以上の例は、銀行の利用者と味方がしばしば重複していたということをも示している。このことは、次のように説明できるのであろう。すなわち、前節で確認したように、銀行は、人的紐帯に基づいて信用が担保されている者に利用を認めるという方法で、銀行業務に伴うリスクを回避しようとしていた。一方、利用者側にとつても、その銀行家を信用していることが、利用に際しての大前提を成していたといえる。^{⑤⑦}つまり、他に信用を担保するための制度・機関が発達していなかった当時の銀行では、このようなパーソナルな信用関係に基づいて取引が行われていたのであり、そもそも銀行利用者がこのような人物に限られていた以上、彼らと銀行家との間には、そうした信用を前提とする密接な協力関係が形成される素地が備わっていたと考えられるのである。このことは、当時のアテナイの銀行家と利用者との関係の特徴的性質であるともみることができよう。

以上、本章の分析によって、次の二点が明らかとなった。第一に、前四世紀アテナイにおける銀行は、取引や紛争にかかわるリスク回避、および、業務の拡大や円滑化といった経営の根本的部分において、銀行家の人的紐帯によって支えられていた。第二に、そうした人的紐帯はしばしば、単なる金銭取引の関係を越えて、相互的かつ継続的な協力関係へと発

展していた。本章では、銀行家がこのような形でネットワークを形成していたという状況を、アテナイ社会とのかかわりの中で分析するところとする。

- ① 事例一、二、三、四、一七。
- ② Isoc. 17. 4.
- ③ [Dem.] 52. 3-4, 7, 11.
- ④ [Dem.] 49. 26-27.
- ⑤ [Dem.] 53. 9.
- ⑥ [Dem.] 33. 6-7.
- ⑦ [Dem.] 49. 31.
- ⑧ Dem. 45. 66-64, 66.
- ⑨ [Dem.] 49. 6-7, 14-17, 22-24.
- ⑩ Isoc. 17. 35-37, 43.
- ⑪ なお、残りの事例でも *Hyp. Alk.* 5 (事例八) と [Dem.] 40. 52 (事例一五) にいって、詳細な経緯が言及されていないため、ソクラテスの個人的紐帯が存在した可能性は否定できない。
- ⑫ Isoc. 17. 4; [Dem.] 52. 3-4, 7, 11.
- ⑬ [Dem.] 49. 26-27.
- ⑭ [Dem.] 33. 6-7.
- ⑮ [Dem.] 53. 9.
- ⑯ [Dem.] 49. 50.
- ⑰ Isoc. 17. 2.
- ⑱ Knorringa(1926) p. 87; Bogaert(1968) pp. 332, 381; Cohen(1992) pp. 205-206.
- ⑲ Cf. Isager and Hansen(1975) pp. 107-108, 150-152.
- ⑳ Dem. 36. 15.
- ㉑ Isoc. 17. 19, 51-52; [Dem.] 52. 14-16, 30. Cf. [Dem.] 34. 21; [Dem.] 52.

- 28. [Dem.] 49. 37-38.
- ⑲ [Dem.] 52. 5-6, 18-19; [Dem.] 49. 18, 33.
- ⑳ Isoc. 17. 51-52.
- ㉑ Isoc. 17. 31-32.
- ㉒ Isoc. 17. 33.
- ㉓ [Dem.] 49. 47.
- ㉔ [Dem.] 49. 19.
- ㉕ Dem. 36. 1.
- ㉖ Dem. 45. 63-64.
- ㉗ Isoc. fr. 8. 1.
- ㉘ クセノイとは、社会の上層に位置する者同士の対等な賓客関係を結んだ外国人のことである。古代ギリシア世界に広く見られたクセノス制度については、G. Herman, *Ritualised Friendship and the Greek City*, Cambridge, 1987 を参照。なお、ソクラテスのような国外ネットワークの形成は、銀行家が国外からアテナイを訪れる商業関係者と取引を行っていたことともかかわるかもしれない。しかし、前述のように銀行業務の具体的内容については不明な部分が多いため、この点についてこれ以上踏み込んだ検討は困難であるように思われる。
- ㉙ [Dem.] 50. 56.
- ㉚ Isoc. 17. 12-13.
- ㉛ Isoc. 17. 19.
- ㉜ [Dem.] 33. 9.
- ㉝ Isoc. 17. 43. Cf. Cohen(1992) pp. 99-100, 133; Shipton(1997) pp. 418-419.

- ③⑦ Cohen(1992) pp. 98-101, 133-136.
- ③⑧ 事例五四および事例五五。Din. 1.41-45では、デモステネスが癒着のある複数の人物から賄賂を受け取った可能性について列挙されているが、これらの銀行家もその中に含まれている。もちろん、市民権は民会決議によって付与されるため、こうした銀行家たちは市民が納得するだけの奉仕を行っている必要があった。しかし、そうした民会決議が行われるためには提案者の存在が不可欠である。また、後述するように、デモステネスは複数の銀行家とかわわっていることから、彼が銀行家エピゲネスやコノンとも個人的に結びついていた可能性は極めて高い。従って、デモステネスが市民権付与提案を行ったこと自体は事実であると考えられる以上、この事例において人的紐帯の存在が市民権付与提案に少なからぬ影響を与えたとみなすこと自体には、一定の説得力があるように思われる。
- ③⑨ Isager and Hansen(1975) pp. 96-97.
- ④⑩ Isoc. 17. 6-7.
- ④⑪ Dem. 45. 66.
- ④⑫ 財産や土地のように「目に見える (pavend) もの」と、預金や貸付のように「目に見えない (apavnt) もの」とに区分する。当時のアテナイ人の認識については、Cohen(1992) pp. 191-194を参照。なお、Cohen(1992) pp. 190-224は、銀行が「目に見えない」市場

において重要な経済的役割を果たしていたと指摘している。ただし、彼はこうした秘密の財産のやりとりを言及してはいるものの、それを可能としていた銀行家と利用者との人的紐帯の性質自体については、詳細な検討を行っていない。

- ④⑬ [Dem.] 49. 16-17.
- ④⑭ [Dem.] 49. 5.
- ④⑮ [Dem.] 52. 5-6において、プロクセノスであるカリッポスが台帳の開示を要求している。また、[Dem.] 49. 43-44では仲裁に際し台帳の写しがとられている。
- ④⑯ [Dem.] 49. 31.
- ④⑰ [Dem.] 49. 3.
- ④⑱ [Trevett(1992) pp. 157-158.
- ④⑲ Dem. 45. 64.
- ④⑳ Dem. 45. 63-64.
- ④㉑ Isae. fr. 8. 1.
- ④㉒ Dem. 21. 215. Din. 1. 43.
- ④㉓ Dem. 27. 11. デモステネスの親戚が銀行を利用したり海上貸付に関与したりしていたことについては、Cohen(1992) pp. 126-129を参照。
- ④㉔ 銀行家にとっての信用の重要性については、Dem. 36. 44に言及がみられる。

第三章 銀行家ネットワークとアテナイ社会

本章は、前章で確認したような銀行家ネットワークが、アテナイ社会といかなる形でかわっていたのかについて考察することを目的とする。そこで、以下ではまず、銀行家ネットワークの特徴自体がアテナイ社会とのかかわりの中で生ま

れたものであることを確認する。次に、アテナイ市民の中でもとりわけ政治家に注目し、彼らと銀行家との関係を検討する。そのうえで、当時のアテナイにおける最重要課題の一つであった穀物供給の問題に関して、銀行家ネットワークの存在が果たしていた役割を考察したいと考えている。

第一節 ネットワークの重層性

前章で確認した銀行家ネットワークには、興味深い特徴を見てとることができる。それは、こうした銀行家ネットワークがアテナイ社会における他のネットワークと部分的に重複していたということ、そして、それゆえ場合によつては、銀行家は特定の人的紐帯を必ずしも利用できるとは限らなかつたということである。以下では、銀行家のために仲裁者や味方としての役割を果たしている者に関する事例に目を向け、この点について検討をすすめる。

イソクラテス法廷弁論第一七番からは、パシオンが当時のアテナイの有力者であるアギリオスと友人であつたということ、そして彼を介して紛争相手の説得を試みていることが読みとれる。^①つまり、パシオンは紛争が生じた際の解決手段の一つとして、アギリオスとの人的紐帯に頼ることが可能であつたといえる。ところが、アギリオスはその後、ボスボロスの有力者である原告側のために、友人であるはずのパシオンにとって不利な証言を行っている。^②アギリオスは、後述するように穀物供給問題に取り組んだ政治家であつたことから、ここでは、穀物生産地としてのボスボロスとの関係を重視していると解釈できる。^③実際に、この原告は弁論中においても、陪審員に対して、ボスボロスとアテナイとの関係を考慮するよう呼びかけているのである。

「サテュロスと父のことを考慮することも、ふさわしいことである。彼らはずっと、ギリシア人たちのうちあなた方を最優先し、すでにしばしば穀物不足のゆえに他の商人たちの空の船を送り出したのだが、あなた方には輸出権を与えたのである。」^④

類似の事例は、伝デモステネス法廷弁論第四九番にも見出せる。ここでは、アテナイ市民アンティパネスが銀行側の主張を支持するような証言をする約束をしていたが、將軍ティモテオスに説得され、証言を行わなかった。^⑤つまり、たとえ銀行家と人的紐帯を結んでいる者であっても、相手の影響力が強く、そちらとの関係を重視することが求められるような場合には、銀行家との結びつきは必ずしも機能するとは限らなかったのである。

また、イソクラテス法廷弁論第一七番の別の箇所では、ソパイオスの息子とパシオンの問題について、ボスポロスにおいて王サテュロスによる仲裁が行われたことが語られているが、この時サテュロスは、パシオンの訴訟相手であるソパイオスの息子を援助するようにと海上交易商人たちに命じたとされる。^⑥後述するように、多くの海上交易商人が銀行を利用しており、彼らと銀行家との間には一定の信用関係が形成されていたことが確認できるものの、この事例における海上交易商人たちは、ボスポロス側に味方する存在として想定されている。つまり、銀行家は必ずしも海上交易商人を味方につけることができるとは限らなかったといえる。ただし、この事例ではサテュロスは最終的に仲裁の裁定を下すことを避けしており、その理由の一つに、「パシオンがこの場にはいない」ことが含まれている。^⑦これは、現地にはパシオンの代わりにキットスなる人物が派遣されていたことによるものであるが、このことは次のことを意味するといえよう。つまり、銀行家パシオンはこの紛争に際して、サテュロスはもちろん、海上交易商人からの援助も期待することができなかったが、それとは別に自分の味方を使者として派遣することで、結果的に自分に不利な裁定が下されることの阻止に成功しているのである。もちろん、この事例で使者をつとめたキットスは銀行の従業員であり、銀行家のその他の人的紐帯とは区別される必要がある。しかし、パシオンの使者をつとめている人物としては、他にもステパノスのような者が確認されていることから、従業員以外が同様の機能を果たす場合も十分あり得たとみてよいであろう。^⑧

一方、伝デモステネス法廷弁論第五二番において確認できる事例では、パシオンとカリッポスとの問題について、リュシテイデスによる仲裁が行われている。^⑨このリュシテイデスは、当事者双方の知り合いであり、パシオンとの友人関係の

ゆえに、パシオンの存命中は彼に不利な裁定を下さなかったが、死後は息子アポドロロスに不利な裁定を下したとされている。^⑩このことは、アポドロロスが必ずしも銀行家パシオンの人的紐帯を利用できなかったということを意味する一方で、逆に、パシオンとの関係がアテナイ市民側によって重視されていたことを示しているといえる。^⑪つまり、リュシテイデスはカリッポスのようなアテナイの有力者と結びついているにもかかわらず、銀行家パシオンとの個人的な関係も無視することができず、彼に配慮するような行動をとっているのである。^⑫また、前述のアギュリオスについても、彼がボスポロスとの関係を考慮しつつもパシオンの頼みを聞き入れていることに注目するならば、可能な範囲内では協力を行っているとみることができよう。従って、銀行家との結びつきは、アテナイ市民側が簡単に断ち切ってしまうことのできるような性格のものではなかったのである。

以上の分析結果が示すように、銀行家ネットワークは、アテナイ社会に張り巡らされていたネットワークと部分的に重複し得るものであった。換言すれば、銀行家ネットワークは、有力者を含むアテナイ市民たちと深くかかわっているという点で、アテナイ社会の中に埋め込まれていたものであったといえる。このことは、場合によっては、銀行家が特定の人的紐帯を利用できないという状況をもたらすものであった。つまり、紛争相手と人的紐帯が競合する場合、仲裁者や味方自身がその板挟みとなってしまう、その親密度や社会的地位次第では、全面的な協力をを行うことが困難であったのである。このようなネットワークの競合は、銀行家がアテナイ市民や海上交易商人を含む多様な人々と広く結びついているという構造上、必然的に生じたものであると考えられる。しかし、銀行家は広い人脈を駆使して、協力を要請し得るような複数のルートを確認することで、そのような状況に対処していた。すなわち、銀行家ネットワークは、人的紐帯を広く重層的に張り巡らせることで、その利用に際しての阻害要因と代替手段の両方を内包するような構造を有していたといえるであろう。そして、このような特徴は、銀行家ネットワークとアテナイ社会が深く結びついている状況の中で形成されたものであったのである。

第二節 政治家にとつての銀行家

次に、前四世紀アテナイの政治家にとつて銀行家との関係がいかなる意味を持つものであったかについて検討する。史料からは、少なからぬ政治家たちが銀行家との間に人的紐帯を形成していたことが読みとれるため、以下では、それぞれ順に検討していく。

まず、イソクラテス法廷弁論第一七番において、友人としてパシオンに協力しようとした人物として言及されている、アギュリオスに目を向ける。^⑮ アギュリオスは前五世紀末から前四世紀初頭に活動した政治家であり、喜劇作家への手当の削減、観劇手当の復活、民会手当の導入・増額といった財政政策を行ったほか、前四〇二／一年に徴税請負代表をつとめたり、前三七四／三年に穀物税法を提案したりしたことが知られている。^⑯ この穀物税法の政治的・経済的意味について検討を行ったSoubisは、アギュリオスが市民・在留外国人・外国人のネットワークの中に身を置いていたということ、さらには、彼らを利用することによって穀物税法が運用可能であったということを指摘している。^⑰ そして、アギュリオスがパシオンに協力しようとした理由についても、こうしたネットワークを守ろうとしたためである可能性が高いとみている。^⑱

パシオンとの結びつきは、アギュリオスの甥にあたるカリストラトスにも確認される。カリストラトスは前四世紀前半に活動した政治家であるが、第二次アテナイ海上同盟の軍役金徴収制度を考案するなど、財政問題にも取り組んだ人物であるとされている。^⑲ そして、アギュリオス同様、彼も友人パシオンに協力する人物として想定されているのである。^⑳

前四世紀半ば以降に活躍したデモステネスについては、Morenoが、当時のアテナイにおける穀物供給との関連で考察を行っている。^㉑ 彼は、第二〇番弁論にみられるような財政問題に関する情報をデモステネスが得られた背景として、次のような状況を指摘する。^㉒ すなわち、デモステネスは父親が海上貸付を行っており、彼自身もこうした投資に関与していた可能性が高いこと、および、彼の祖先はボスポロス王国と深いつながりがあり、デモステネス自身もこの地域の有力者と

のクセニア関係を維持していた可能性があることである。さて、Morenoは立ち入った検討を行っていないものの、注目すべきことに、このデモステネスは複数の銀行家との間にも関係を形成しているのである。前述のとおり、彼は銀行家エビゲネスとコノンに市民権付与提案を行っており、その背景には人的紐帯の存在が想定されている。また、銀行家ブレパイオスと個人的に結びついていたこと²³、さらには父親がパシオンやピュラデスの銀行を利用していたことも知られている。Colarisは、デモステネスが海上貸付や銀行への投資によって富を得ていた可能性を指摘しているが、このように何人も銀行家と結びついていたことからは、彼が単に金銭を獲得するのみならず、銀行家との広い人脈を形成することをも意図していたことがわかる。

それでは、以上のようにアギュリオス、カリストラトス、デモステネスという前四世紀アテナイの財政問題に関与している有力政治家たちが、いずれも銀行家と関係しているという状況は、どのように解釈すべきであろうか。SorbeyやMorenoが指摘しているように、少なくともアギュリオスとデモステネスは、銀行家以外の商業関係者との間にも結びつきを形成しており、そのネットワークは彼らの政治的キャリアにとって重要なものであったと考えられる。そして、そのような中で彼らが銀行家とも積極的に結びついていたことは、銀行家との人的紐帯もまた、彼らのキャリアにとって有用であったことを示しているとみてよいであろう。

さらに、史料からは、銀行家と結びつくことで軍事遠征に関する資金を獲得しようとしている者たちの存在も読みとれる。將軍ティモテオスは、遠征に出発するに際しパシオンの銀行から資金を調達しているほか²⁴、遠征途中に海上交易商人から借りた金についても、パシオンから借金することで返済している。当時のアテナイでは、將軍やトリエラルコスが自ら遠征費用を調達する必要があり、そうした状況下では、資金の貸し手を確保することが極めて重要であったといえる。

岩田はこの点に注目し、銀行が彼らの資金供給源となっていたと同時に、銀行側にとつてはこれらが安定的で確実な貸付分野となっていたという指摘を行っている。一方Milletは、ティモテオスはこの時他の市民たちから借金を行うことが

できず、最終手段としてパシオンの銀行を利用したにすぎないとしている^④。しかし、ティモテオスが長期間にわたり繰り返シオンの息子に頼ったということは、そうした状況が決して一時的な例外ではなかったことを示している。実際に、パシオンの息子でありアテナイで政治活動を行ったことが知られているアポドロコスについても、同様の状況を見てとることができるのである。彼はトリエラルコスとして遠征に参加していた際、父親である銀行家パシオンの人的紐帯を頼って資金の提供を受けている^⑤。パシオンの息子という特殊な立場にあるとはいえ、理想的なアテナイ市民であろうとしたアポドロスが、銀行家の人的紐帯を駆使しているということは、このようなネットワークがこの目的に際して極めて有用なものであったことを意味するといえよう^⑥。さらに、前三五年頃にシュントリエラルコスに任命されるだけの財産を有していたステパノスは、当初は銀行家アリストロコス、その後はポルミオンと結びついており、とりわけポルミオンとの間には継続的な関係を形成していた^⑦。ここからは、有力政治家以外の富裕アテナイ市民の中にも、銀行家との結びつきを必要とする者が存在していたことが読みとれるであろう。

また、ティモテオスが必要に応じて銀行を利用することができた背景には、前章で確認したような、利用者との継続的な相互扶助関係の中で銀行が経営されていたという事情を見てとることができる。加えて、ここでは銀行家との結びつきが遠征費用の提供にとどまらず、より広範な協力につながっている点に注目したい。というのも、ティモテオスは、自身が告発された際に援助に駆けつけた、外国の有力者アルケタスとイアソンを接待するための物品や金銭を借用したり^⑧、マケドニア王からの贈与品の受け取りに必要な費用の立て替えを依頼したりする^⑨という形で、パシオンに協力を求めているのである。つまり、これらはいずれも、彼の政治的立場を間接的に支える役割を果たしているとみなすことができよう。このように、アテナイの政治家たちは銀行家と積極的に結びついており、その背景としては、岩田が指摘しているような遠征費用の確保という事情に加えて、彼らが政治的キャリアを積み重ねていく際の人脈や資金を調達したり、財政問題に取り組んだりするために、銀行家との人的紐帯を必要としていたということが見てとれる。先行研究では、これらにつ

いては各政治家に関する考察において個別的・部分的に言及されるにとどまっていたが、前四世紀アテナイにおいて穀物供給や軍事費用の確保を含む財政問題が重要な課題となっていたことをふまえるならば、このことは、銀行家ネットワークの存在が当時のアテナイ社会の根幹にすらかかわるような政治活動を支える役割を果たしていたことを意味するといえるであろう。

第三節 海上交易活動にとつての銀行家

最後に、当時のアテナイにおいてとりわけ重要であった穀物供給問題の中での銀行家の役割を検討するために、彼らと海上交易商人との結びつきに目を向ける。海上交易商人が銀行を利用してゐる事例は七例存在するが、このうち四例が保管業務^⑧、一例が海上貸付の証人の役割^⑨、一例が貸付^⑩、一例が海上交易商人たちはパシオンの銀行を利用してゐたという一般的言及である^⑪。つまり、商人による銀行利用の事例としては、保管業務が過半数を占めてゐるのである。もちろん、これが銀行業務に関する実際の割合をどれほど正確に反映してゐるかについては断定できないものの、少なくともここからは、銀行による保管業務が海上交易商人にとつて一定の重要性を持つものであったということは読みとれるであろう。

こうした保管が行われている四つの事例のうち、半数の二例を占めるのが、海上貸付契約文書の保管の事例である。当時のアテナイを交易圏に含む海上交易商人たちは、海上貸付による資金提供を受けて交易活動を行っていたが、その契約に際しては、航路や期間、輸入品目等について詳細な規定を定めた契約文書が作成された^⑫。つまり、海上貸付契約文書は交易活動を行ううえで重要な役割を果たすものであったといえる。さらに、これらの契約文書は、海上交易を促進するために前四世紀半ばにアテナイで整備された制度である、商業裁判とのかかわりにおいても大きな意味を持つものであった^⑬。というのも、商業裁判は迅速な裁判手続きといった形で商人の利便性を考慮していたが、この商業裁判が受付対象としていたのは海上貸付契約文書のある案件に限られていたため、契約文書を提示できない場合には、抗弁をとおして訴えその

ものが無効化される可能性があったのである。^④

従って、海上貸付契約文書は、実際の交易活動においても商業裁判制度においても重要なものであり、その偽造・紛失を避けるためには、信頼できる第三者にゆだねる必要があったといえる。このことは、文書を適切な人物の管理下に置かなかった場合にいかなる問題が生じたかを示す例からも確認することができる。例えば、イソクラテス法廷弁論第一七番では、銀行家ではない者に同意文書の保管をゆだねているが、その後この文書について改竄の疑惑が生じている。また、伝デモステネス法廷弁論第三三番においても、仲裁者に預けられた同意文書が紛失したため、その内容が無効となつているのである。^⑤

ここで注目に値するのが、海上交易商人たちが契約文書の保管先を選択するに際し、このような信用できる第三者として、銀行家が適任であると考えているという点である。というのも、商業裁判に関するものとして伝わる計五編の法廷弁論のうち、三編において契約文書の保管場所への言及がみられるが、そのうち二編が銀行を保管場所としている。また、残りのうち一編ではおそらく銀行家ではない市民が文書を保管しているものの、契約締結時の証人の一人を銀行家ポルミオンがとめていることが確認される。^⑥さらに、保管場所への言及がみられない二編のうちの一編では、銀行自体が貸付を行っているのである。^⑦つまり、商業裁判に持ち込まれた事例の大半において、銀行家が契約文書の作成または保管に関与しているという状況を指摘することができる。^⑧

これらの銀行家はいずれも別の人物であることから、このような信用の存在は、当時のアテナイにおける銀行家と海上交易商人の関係自体に起因するものであったとみてよい。第二章で検討したように、銀行家と利用者は継続的な人的紐帯に基づく信用関係を築いていたが、史料からは、多くの海上交易商人たちが銀行を利用していった様子が読みとれる。そのため、海上交易商人たちもまた、銀行家との間にこのような信用関係を形成していたと考えられよう。^⑨つまり、海上交易商人が銀行家に契約文書の保管をゆだねている背景には、前四世紀のアテナイにおいて、銀行家と海上交易商人たちとの

間に広く信用関係が存在していたという事情を見てとることができるのである。ここからは、契約文書の確実な保管という、海上交易商人たちが交易活動を行ううえでリスク回避の手段が、信用関係に基づく銀行家ネットワークの中に埋め込まれていたという状況をも指摘することができる。

銀行がこのように契約文書の保管場所を提供していたことは、アテナイの穀物供給にとつても重要な意味を持つ。前述のとおり、商業裁判は商人誘致を目的として整備されたものであったが、そこで受付対象とされたのは、海上貸付契約文書が存在する案件に限られていた。ところが、このような文書の有効性を実質的に担保していたのは、銀行家と海上交易商人との既存の信用関係であったのである。換言するならば、商業裁判制度の実際の運営面は、銀行家ネットワークによって支えられていたといえるであろう。

- ① Isoc. 17. 31.
- ② Isoc. 17. 31-32.
- ③ 本稿第三章第二節。 Cf. Sorg(2015) p. 57.
- ④ Isoc. 17. 57-58.
- ⑤ [Dem.] 49. 19.
- ⑥ Isoc. 17. 52.
- ⑦ Isoc. 17. 52.
- ⑧ 事例四八を参照。
- ⑨ [Dem.] 52. 14-16. 30-31.
- ⑩ 仲裁者が一方に不利な判定を下すことを躊躇するであろう状況は、他の事例においても見出すことができる。例えば、[Dem.] 34. 21 では、仲裁者が当事者と親しく、裁定を下すことを拒否している。また、[Dem.] 52. 28 では同じ区の所属であり有力政治家である者に対しては不利な証言を行いつつ、そのことが示されている。また、[Dem.] 49. 37-38 では、友人のために、嘘の証言はしないものの不利な証言も行

わなという様子が読みとれる。

- ⑪ [Dem.] 52. 30-31.
- ⑫ カリッポスの力の大々たることについては、[Dem.] 52. 1-2. 28 の発言及がみられる。
- ⑬ Isoc. 17. 31.
- ⑭ Ar. Ran. 367; Philochoros, *FGrH* 328 F33; [Arist.] *Ath. Pol.* 41. 3. Andoc. 1. 133-135; SEG XLVII 96. 穀物税法について R. S. Stroud, *The Athenian Grain-Tax Law of 374/3 B. C.*, *Hesperia* 29 1998, pp. iii-v, vii, ix-xi, xiii-xv, 1-13, 15-117, 119-140; P. J. Rhodes, and R. Osborne (eds.), *Greek Historical Inscriptions: 404-323 B.C.*, Oxford, 2003, pp. 118-129 を参照。アギエリオス以外の他、前四〇三年に監獄会の書記が、前三八九／八年に將軍をつとめた。 Cf. J. K. Davies, *Athenian Propertied Families, 600-300 B.C.*, Oxford, 1971, pp. 278-279.
- ⑮ Sorg(2015) pp. 56-59.

- ①9 Sorg(2015) p. 57.
- ①⑩ Theopompus, *FGH* 115 F98. Cf. R. Sealey, *Callistratos of Aphidna and His Contemporaries*, *Historia* 5, 1956, pp. 178-203 特上 p. 188.
- ①⑪ [Dem.] 49, 47. Sealey(1956) p. 193 は「カリストラトスが友人バシシオンから軍事資金を調達する計画を検討したかもしれないと推測している」。
- ①⑫ A. Moreno, *Feeding the Democracy: The Athenian Grain Supply in the Fifth and Fourth Centuries BC*, Oxford, 2007, pp. 177, 251-260.
- ①⑬ Moreno(2007) pp. 253-254 特上 Dem. 20, 33 におけるバシシオスが「商人たちから得た情報に言及してその点に注目している」。
- ①⑭ Moreno(2007) pp. 254-255. Cf. Dem. 27, 11; Dem. 28; Din. 1, 43; Aeschin. 2, 78-79; 3, 172.
- ①⑮ Din. 1, 43.
- ①⑯ Dem. 21, 215.
- ①⑰ Dem. 27, 11.
- ①⑱ Cohen(1992) pp. 121-129.
- ①⑲ [Dem.] 49, 6-7.
- ①⑳ [Dem.] 49, 14-17. なお、第二章第二節で確認したように、バシシオンがティモテオスに長期間の融資を行った背景には彼からの見返りへの期待があったと考えられる。しかし、海上交易商人ピリッポスの場合は、アテナイ市民であったにもかかわらず、そうした将来的な見返りよりもむしろ、直ちに借金が返済されることを望んでいる。従って、この事例は、アテナイの有力者との継続的協力関係の形成を求める傾向が、とりわけ銀行家に顕著にみられる特徴であったことを示唆しているといえよう。
- ㉑ 岩田(一九七四)七四〇-七五頁。
- ㉒ 岩田(一九七四)七三〇-一九頁。
- ㉓ Millet(1991) pp. 212-215.
- ㉔ [Dem.] 50, 18, 56.
- ㉕ 前沢(一九九八)五八〇-五九頁。 Cf. [Dem.] 50, 26.
- ㉖ なお、アキロトスにたいして、前三四九〇八年に、国庫の剰余金を軍事費に流用するか観劇手当とするかを民会で決定するという提案を行ってそのうちから、彼もまた財政にかかわっているといえる。
- ㉗ Cf. [Dem.] 59, 4; Trevett(1992) pp. 124-129, 138-139.
- ㉘ *IG II²* 1632; Dem. 45, 63-64, 66.
- ㉙ [Dem.] 49, 22-24.
- ㉚ [Dem.] 49, 26-27.
- ㉛ [Dem.] 52, 3-4, 7, 11; [Dem.] 49, 31-33; [Dem.] 34, 6; [Dem.] 56, 15.
- ㉜ [Dem.] 35, 13-14. なお、このセネカトンの同定については Davies (1971) p. 436 を参照。
- ㉝ [Dem.] 33, 6-7.
- ㉞ [Dem.] 52, 3-4.
- ㉟ [Dem.] 34, 6; [Dem.] 56, 15.
- ㊱ Cf. [Dem.] 35, 10-13.
- ㊲ 商業裁判 dikai eirropikai については E. E. Cohen, *Ancient Athenian Maritime Courts*, Princeton, 1973 を参照。社会的ネットワークに根差したアテナイの通常の裁判とは異なり、商業裁判では契約文書を証拠として認めるといった、特別の措置がとられていた。 Cf. A. Lanni, *Law and Justice in the Courts of Classical Athens*, Cambridge, 2006, pp. 149-174. なお、dikai eirropikai については「海上貿易に関する訴訟」や「商業関係裁判」といった訳語があてられることもあるが、本稿では紙数の都合上、馬場恵二「アテナイにおける在留外人の訴訟能力」『青山学院女子短期大学紀要』一九、一九六五年、一〇一-一八頁、特に一五〇-一六頁に従い、「商業裁判」という訳語

を採用した。

④ [Dem.] 33. 23. Cf. Isager and Hansen (1975) pp. 84-87. J. Velissaropoulos, *Les banques grecs : recherches sur les institutions maritimes en Grèce et dans l'Orient hellénisé*, Geneva, 1980, pp. 235-252.

⑤ Cf. [Dem.] 33. 1-3, [Dem.] 34. 4.

⑥ Isoc. 17. 20.

⑦ [Dem.] 33. 15-18.

⑧ [Dem.] 34. 6; [Dem.] 56. 15.

⑨ [Dem.] 35. 13-14.

⑩ [Dem.] 33. 6-7.

⑪ なお、銀行家が文書の保管を行っている事例は、海上貸付以外に、抵当標石におよぶことも確認することがある。IG II² 2741は、銀行家エウクレスが契約文書を保管しているのである。この事例からも、銀行家が文書の保管に関して適任であると考えられていたことがうかがわれる。

⑫ 興味深いことに、海上交易商人の中には、銀行家との間に単なる金銭取引を越えた関係を形成していた者すら存在したことが確認される。Cf. [Dem.] 49. 31-33.

おわりに

以上のように、銀行家の人的紐帯についてまとまった分析を行ったところ、次のような点が明らかとなった。第一に、銀行家ネットワークは、リスク回避や業務の拡大・円滑化といった、銀行経営の本質的部分を担っていた。第二に、銀行家は利用者との間に人的紐帯に基づく継続的な信用関係を形成しており、これらは時に、金銭取引を越えた協力関係にまで発展していた。第三に、銀行家ネットワークはアテナイ社会における他のネットワークと部分的に重複していた。その中で銀行家は、広く人的紐帯を張り巡らせることによって、その利用を阻害する要因と代替手段との両方を内包するような、重層的なネットワークを形成していたといえる。第四に、こうした銀行家と結びつくことは、当時のアテナイの政治家にとって望ましいことであった。そして、これは有力者との結びつきを求める銀行家側の利益とも一致していた。第五に、銀行家と海上交易商人たちとの間の信用関係の存在は、契約文書の有効性を担保するという形で海上交易活動を支える機能を果たしていた。このことは、銀行家ネットワークが、商業裁判制度を運営面において支えると同時に、商人たち

のリスク回避の手段をも提供するものであったことを意味している。

ここで重要であるのは、これらの分析結果は相互に関連しているということである。すなわち、人的紐帯に依拠した当時の銀行経営のあり方と、市民も銀行家との結びつきを必要とするような社会的状況という、それぞれ銀行側とアテナイ社会側にかかわるような事情の中で、銀行家ネットワークは形成・維持されていたのであった。ここからは、アウトサイダーというよりもむしろ、アテナイ社会内部に深く食い込んでいる存在としての銀行家像が浮かび上がるであろう。

加えて、このような銀行家ネットワークが、海上交易商人とアテナイ社会との結びつきを促進する役割をも果たしている点に注目したい。つまり、筆者は旧稿において、海上交易商人の人的紐帯がアテナイの商業関連制度と相互にかかわっていたことを指摘したが、本稿の結論をふまえるならば、そのような状況を背後で支えていたのは、制度面以外の部分にまで広がる形で形成されていた、銀行家ネットワークの存在であったということが出来る。

本稿では、前四世紀アテナイで行われた商業活動のうち銀行業に着目して考察をすすめたが、それ以外の商業活動についても、背景にある人的紐帯に目を向けることで、従来とは異なる観点から検討を加える必要があると考えている。とりわけ、本稿では論じることができなかったが、海上交易商人に関しても、制度面以外でも社会とのかかわりがあった可能性は高いとみている。これらの考察については、今後の課題としたい。

【付記】本稿の作成にあたり、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）（課題番号：25・3755）の支援を受けた。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

The Nature and Function of the Banking Network in Athens in the Fourth Century BC

by

SUGIMOTO Hinako

It is known that in the fourth century BC a great many people who were engaged in commercial activities were attracted to Athens. Athenians had suffered from serious grain shortages and were therefore dependent on grain imported by maritime traders, who often used banks in order to deposit or exchange money. In previous studies, it has been emphasised that those who engaged in economic activities were “outsiders” in the *poleis*. However, it is clear from primary sources that these people established relationships not only with other non-citizens but also with Athenian citizens, and thus it would seem that the previous view of the traders and bankers as “outsiders” should be revised.

Based on this point of view, this paper focuses on the banking network in fourth century BC Athens. Since previous studies on banking have been carried out in the context of the debate on the nature of the ancient economy, the main focus of discussion has been on whether loans were productive or consumptive and whether or not bank deposits bore interest. Although E. E. Cohen and K. M. W. Shipton have pointed out the importance of bankers in Athenian society, their views have not completely supplanted the idea of “outsiders” since they discussed the economic function of loans and deposits rather than the role of the banking network. In order to address this problem, this paper examines the nature and function of the banking network as a whole, and thus clarifies 1) how banking operated within the banking network, 2) the nature of the network, and 3) how the banking network was related to Athenian society.

Personal relationships involving bankers can be categorised according to the nature of the relationship a person had to the banker, whether customer, mediator, supporter, and so on. Importantly, in most cases the customers were either acquaintances of the banker or people who these acquaintances had introduced. This suggests that customers were restricted to people

whose trustworthiness could be personally vouched for, and this can be interpreted as a strategy of risk avoidance. Turning to the mediators and supporters, they would have provided important aid when the bankers encountered problems. Thus, it can be concluded that it was a network of bankers that sustained the fundamental basis for banking operations. On the other hand, however, this relationship of reliance was not one-sided. For example, two customers of a bank, Stephanos and a son of Sophaios, attempted to hide their money with the aid of a banker named Pasion. Similarly, Timotheos lied about borrowing money from Pasion for military purposes, officially reporting that the money had come from a military fund. These examples indicate that customers must have trusted their bankers not to divulge their secrets. It can therefore be said that bankers and customers established a cooperative relationship, characterised by mutual trust.

This network, however, was not always available. There are many examples where a banker could not make use of a relationship and so looked for an alternative. When an ally of a banker also had a relationship with other individuals whose interests clashed with those of bankers, difficult situations in which the ally could not aid the banker might arise. In this sense, it can be said that the banking network was embedded in the network of Athenian society.

Furthermore, bankers often had close relationships with Athenian politicians. *Agyrrios*, *Callistratos*, and *Demosthenes* were all influential politicians who were involved with financial policy at that time, and all of them had relationships with bankers. In the case of Timotheos, he sought a relationship with a banker both because he needed to borrow money for military purposes, and because bankers could indirectly assist his political career. *Apollodoros* and *Stephanos*, who had served as a *trierarch* and a *syntrierarch* respectively, were connected to bankers as well. The fact that these Athenians sought a relationship with bankers shows that the banking network functioned as an aid for their political careers or as a source of funds for military activities, which were deeply related to the structure of Athenian society. Moreover, the banking network even sustained the system of maritime loans because traders entrusted their written contracts to bankers for safekeeping.

In conclusion, the analysis above has identified many aspects of the banking network. Firstly, the banking network was a key element that sustained banking operations. Secondly, this network was embedded in Athenian society. Thirdly, this network partly sustained the structure of

Athenian society. Considering all these aspects, it seems necessary to dismiss the traditional view of bankers as “outsiders”.

The *Sayama* Domain’s Administration of the *Sayamaike* Reservoir
under the Rule of the Tokugawa Shogunate in the *Kamigata*
Region circa the Beginning of the Eighteenth Century

by

SHIMAMOTO Kazuyuki

This article addresses the question of how the Sayama domain, under the rule of the Tokugawa shogunate in the Kamigata region, came to administer the Sayamaike reservoir at the beginning of the eighteenth century, despite it being customary at that time to place responsibility for managing rivers, lakes and reservoirs with administrators of the shogunate. This paper will also illuminate the structure of government, and the methods of flood control employed by the shogunate and domainal lords of the period.

From the middle of the seventeenth to the early eighteenth century, the shogunate established a system for maintaining dikes on the banks of large rivers, such as the Yodo and Yamato. Under this system, the responsibility for funding maintenance and mobilizing workers in the Kamigata region fell to the shogunate, not the local domains. This did not, however, apply to smaller and medium-sized rivers, lakes and reservoirs, such as Sayamaike. The *hiyakunin*, those in charge of managing this reservoir and controlling its sluice gates, were not under the jurisdiction of the Sayama domain or the shogunate, but were instead subjects of the Kawagoe domain. As a result, they would not comply with orders from the Sayama domain, even if these orders were issued in the event of a flood as part of an attempt to defend the reservoir. When a flood did occur in 1716, this resulted in the *hiyakunin* failing to prevent a dike of the Sayamaike reservoir from bursting. To compound matters, since administrators of the shogunate were not responsible for maintaining Sayamaike under the system in place at the time, they did not fully cover the cost of repairs to the reservoir.

In 1718, after the aforementioned flood, Hanamura Zensuke, a retainer of the Sayama domain, applied to the Osaka Machibugyo-sho, a department of